The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	昭和初期の日本の近代建築における「合理主義」：東京帝室博物館設計競技を手がかりに
Author(s)	森本, 浩司
Citation	デザイン理論. 2009, 54, p. 64-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53574
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

昭和初期の日本の近代建築における「合理主義」
── 東京帝室博物館設計競技を手がかりに

森本浩司／株式会社　東芝

0．はじめに

本論では，1930年から31年にかけて行なわれた東京帝室博物館設計競技（以下，博物館設計競技とする）を取り上げたい。博物館設計競技の設計心得，設計案に関する説明書，設計競技の周囲に位置する論考，当選案，落選案を手がかりに，昭和初期の日本の近代建築における「合理主義」について考える。

1．設計競技の背景と概要

1930年代初頭には，建物に「日本趣味」を取り入れる流れが建築設計競技において見られるようになった。それぞれの入選案に共通しているのが，躯体と屋根のアンバランスな構図である。躯体はコンクリートで作られ，箱形の形状で窓がほぼ等間隔に配される一方，屋根は日本の過去の建築に見られる瓦葺きの勾配屋根が用いられる。コンクリートの躯体に瓦葺きの屋根を冠するデザインは，「帝冠様式」と呼ばれ，当時の日本の建築界においてひとつの主流となった。

博物館設計競技においても外観の指定はなされた。設計心得の第五には

一　建築様式は内容と調和を保つ必要あるを以て日本趣味を基調とする東洋式とする

二　陳列室内の意匠，造作は建物全體の様式に相應するものなるを要するも陳列品に對する歴史還元の意味に於ける特別の施設をなさずして單純化を原則とすること（註）

とある。まず一で，博物館の内容と建築様式の調和が求められる。「内容」とは，博物館の所蔵品や陳列品を指す。日本だけのものではなく，中国を含めたアジアの古代美術品や考古学資料であることが読みとれる。陳列品と博物館の外観との調和という観点から，「日本趣味」が求められたのであろう。そして二で，陳列室内の意匠，建物全体の外観，陳列品との関係が問われる。陳列室内の意匠と建物全体の外観の関係は，「相應する」との記述からも分かるように調和が求められる。しかし，陳列室内の意匠は，陳列品の内容に特別こだわることなく単純化が試みられる。

2．入選案と応募拒否声明

博物館設計競技において，設計応募図案は，1931年４月30日の締め切り日までに273点が提出された。審査は下審査と本審査の二段階で行なわれ，投票の結果，入選案５案と，佳作案５案が決定され，一等の渡辺仁（1887-1973）の案をもとに実施されることとなった。さらに，博物館設計競技では，日本インターナショナル建築会による，応募拒否声明が注目される。彼らは，心得の第五における「日本趣味を基調とする東洋式」という言葉を「偏狭なる個人的趣味」とみなした。日本趣味しか認めない審査方針や募集規定には従えないというのが主張の核となる。さらに，先にあげた応募の段階で「日本趣味」や「東洋趣味」が求められる建築設計競技の経過からして，審査に信任をおけないと考えた。これらの設計競技では，結局は帝冠様式の案が実施されたので，経過から考えて今回も同様の

ことが想像できるだろうとの趣旨である

実際，入選案と佳作案においては，勾配屋根が用いられ，壁面には付加的な装飾が施されている。過去の日本の木造建築の様式等をコンクリートに移し替えたと考えられる。第１等の渡辺仁の案を例に挙げると，瓦葺きの勾配屋根が躯体を覆い，縦長の矩形の窓が均一の間隔で備え付けられている。このように，日本インターナショナル建築会の批判であげられた「日本趣味」は，帝室博物館設計競技においても見られるものとなった。

３．落 選 案

雑誌『国際建築』1931年６月号には，落選案の一部が掲載された。それが，蔵田周忠（1895-1966）と前川國男（1905-1986）の２案である。蔵田と前川の案を見ると，入選案や佳作案との違いは明確に見てとれる。まず蔵田は，瓦葺きの勾配屋根ではなく，モダニズム建築で一般的な陸屋根を用いている。建物全体は，直線を重視したデザインになっており，全体は直方体に近い構成でまとめられている。立面図からは，壁面への装飾はほとんど施されていないことが分かる。一方，前川も陸屋根を用いている。そして，壁面には必要以上の装飾は施さない。ただし建物全体の構成に目を向けると，蔵田が全体を直方体でまとめたのに対し，前川は直方体の形状をした３つの建物を遊歩廊でつないでいる。

ただし，両者の立脚点は異なる。蔵田は，自らの案を過去の日本の建築との関連で語っている。神社，住宅，茶室などに注目し，それらに共通する平面・構造の簡素化，無装飾，直線の多様といった特徴が，モダニズム建築のそれと合致するとみなす傾向があった。一方前川は，説明書において過去の日本建築について触れているが，あくまでも視点は「現代」に向いている。前川は，古来の日本建築の要素を現在の材料で作り上げること，つまり現代の要素とは異なった要素を取り込んで生み出される「日本趣味」を批判した。これは日本趣味を，日本の伝統に立脚するものと解釈した蔵田の考えとは異なる。

４．おわりに

振り返ると，初めに述べたような単に経済性や便利さを追い求めたり，表現上の模倣に走ったりするものばかりではないことが分かった。蔵田や前川によって，日本の建築界においても，「合理主義」そのものの成熟が見てとれた。ただし，そこには何かしらの折衷的なものも見てとることが出来る。しかし，戦局が悪化するにつれて建築家の活動にも制限が加えられる。いわば，欧米化される前の日本の建築界に逆戻りしてしまった。そのような中でも，建築家の中には，外観や構造といった実践の面ではなく，自らの思想において「合理主義」の目指すところについて語る流れもでてきた。例えば，1943年から44年の日泰文化会館設計競技における丹下健三（1913-2005）や前川國男の試みは，その例として検討する価値があるだろう。

註

『建築雑誌』1930年12月号「東京帝室博物館設計圖案懸賞募集規定」，第五　様式，意匠に關する事項，p. 149